

岩崎 純一 著

『岩崎純一全集』 第三十九卷「社会科学（一の九）」

社会、国民生活（五）

風俗習慣、冠婚葬祭、年中行事、風潮、流行、国民性、都道府県民性

編纂、監修

岩崎純一学術研究所『岩崎純一全集』編纂局

巻頭言

本巻は、『岩崎純一全集』の第三十九巻を成し、岩崎の言語の著作物のうち、風俗習慣、冠婚葬祭、年中行事、風潮、流行等に関する述作を収める。

目次

巻頭言

第一編 〇歳～十九歳

第二編 二十歳～二十九歳

第一部 謹賀新年

第二部 三砂ちづるさんの考える「オニババ」について

第三部 謹賀新年

(編集) 現代日本社会の実相

第一章 国民の生活と行動

第一節 超少子高齢晩婚化社会

第二節 「一億総白痴」と「大衆迎合」

第三節 スマホ、ゲーム、アニメ

第四節 記念日商戦への参加

第五節 会話、応答の減衰と家族、友人、恋愛

第六節 男女平等社会の真偽 女性及びLGBTの権利

第七節 憲法、投票、右翼、左翼

第二章 国民の死生観

第一節 葬式ビジネスと横文字としての死（エンディング）

第二節 死者の埋葬と墳墓

第三節 新宗教系教団の実態

第三編 三十歳～三十九歳

第一部 謹賀新年

第二部 謹賀新年

第三部 「都民性」とは何か 憲法の「公共の福祉」規定から考える・

第四部 謹賀新年

第五部 「歩きスマホ」をカント哲学から考える

第六部 謹賀新年

第七部 遅い？新年の挨拶

第八部 謹賀新年

第四編 四十歳～四十九歳

第五編 五十歳～五十九歳

第六編 六十歳～六十九歳

第七編 七十歳以降

第八編 著作者の一部および著作権者が岩崎純一であるもの

第九編 著作権者が岩崎純一であるもの

第二編 二十歳〜二十九歳

第一部 謹賀新年

二〇一一年一月二日 起筆、擱筆、公開

本文は創作性を伴わず、著作物と見なし得ないため、パブリック  
ドメイン

著作者を明示する引用の場合のみ、CC BY-NC-ND 4.0

明けておめでとうございます。

本年もよろしくお願い致します。

第二部 三砂ちづるさんの考える「オニババ」について

二〇一一年一月七日 起筆、擱筆、公開

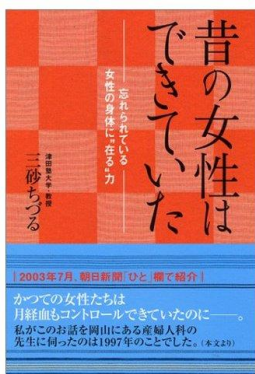


『オニババ化する女たち 女性の身体性を取り戻す』（光文社新書、  
二〇〇四）を改めて読んだ。

出版された時点で読んでいた本ではあったのだが、最近著者の三  
砂（みさご）ちづるさんとお会いする機会があったことと、自分の  
「女性の排卵・月経などが察知できる感覚」と関連付けることがで  
きる点を探してみようという思いがあったことから、以前よりも精  
読した。（僕自身は便宜上、この感覚を共感覚の一つと見て「対女性  
共感覚」と名付け、初著でもそう書いた。）

「オニババ」というタイトルを見た当時は、「挑発的なタイトルだな  
」と思ったものだった。

しかし、読み返してみた今、「ヤマンバルック」や「汚ギヤル」と  
いう言葉が流行したくらいだから、本来の女性らしさを失っている  
（と三砂さんや三砂さんに賛同する女性自身がお思いである）日本  
の女性を「オニババ」と呼んでみたところで、何か女性に対して失



礼に当たるような響きは感じられなかったし、むしろそのような響きはもはやあまり効果を持たない世相だろうという気さえした。

さて、『昔の女性はできていた——忘れられている女性の身体に在る力』（宝島社、二〇〇四）というご著書の中では、日本女性や太古社会の女性にできていたと三砂さんがお考えになっている習慣（自分の月経や排卵が察知できる、月経血を溜めてトイレに行つて出す、など）が細かに挙げられている。

もちろん、これらの能力の全てを持っていればそれで良いとは限らない。昔と今とでは食べ物も違う上、身長も平均で十センチ伸びているから、安易に比較はできない。

ただし、昔の日本女性にそのような能力があったとするなら、それに対応する男性の能力も昔の日本男性にはあったはずだというのが、そもそも僕の考えでもある。僕の「対女性共感覚」は、三砂さんのような教育者の女性や医療関係者の女性、巫女さん、主婦、お年寄りの女性などが注目して下さることが多い。

三砂さんのように、和服をお持ちで、それで日常生活を送ることなどは、今や一部の女性にしかできないことだとは思う。和服で通つてよい学校や職場などほとんどないし、和服を買うお金があるなら明日の食費に使うというのが、ほとんどの女性の正直な心境だと思う。そのような女性の行動だけをもって非文化的・非教養的・非日本的な生活であると言うことはできない。

このような不況下で「私はそうではない」と断言できる女性が大多数であったなら、むしろ不自然だという気がする。

それは確かにその通りで、日本的なモノを所有することが日本的なヒトであることなどは限らない。ただし、そのことは差し引いて考えるにせよ、ともかく、廃れていつている日本の男性・日本の女性の特質があるとすると、そのことには寂しさを感じるということも、また僕の正直な心境である。

三砂さんの著書には今でも賛否両論ある。実際、三砂さんの著書を読んで反発を覚えた女性は多かつたようだし、Amazon のレビューにもむしろ傷ついた女性からの切実な悲鳴と批判が見られることや、僕の周りでも「三砂さんの言葉は、私にはちよつときつい……」という感想を述べた女性がいることには、僕も注目している。この点ばかりは、三砂さんの論理が勝利しているわけではなく、反三砂派の女性にもかなりの分がある。

なぜ一部の若い日本女性がそのような反応になるのか、（個人的には三砂さんの著書の内容の大半に賛同できることを断つた上で、）今回はあえてそういった日本女性の味方をして書いてみたい。

三砂さんの「女は、男から愛され、恋愛・結婚・妊娠・出産することが幸せなのだ。それを忘れて今の日本の女はオニババになるのだ。ナプキンなんて本当はいらぬのだ。おおらかに和服生活をして、女性の性の喜びを味わって生きるのが本来の姿なのだ」という主張は、むしろ、「心から愛し愛される男性に出会うまではそれらの機会（結婚・妊娠・出産）を大切に後々までとっておく」という慎重で丁寧な女性にとっては、逆に心の傷になる可能性があるということだと思う。

三砂さんの文章を引用しておく。

「結婚において相手をとこと細かく選ぶようでは、だめだと思えます。誰かとともに暮らすことを第一にして、とにかく縁があった人と、誰とでもいいから結婚するというぐらいが、大事だと思います。」

『オニババ化する女たち 女性の身体性を取り戻す』 p184)

一部の若い女性が言うように、三砂さんのこの「恐るべき」「のんきな」主張は、「三砂さんが恋愛・結婚・妊娠・出産・離婚を経験され、大学教授という社会的地位に就かれ、日常生活で和服を着るだけの余裕をお持ちだったからこそ、できた主張」であるかもしれない。

「女は、男のように社会に出てがつがつと働くべきではなく、結婚し、自分の体と向き合い、控えめに生きるべきだ」という控えめでない主張を世に広めるだけの力は、確かに、すでに男性と対等な社

会的地位を有する女性か、精神的・経済的に余裕のある女性しか持ち得ないのが事実だろう。

「今から私も、すてきな恋愛をして、すてきな仕事を見つけない」と思っている若い女性は、むしろ「今の女は、男のように社会に出ないと大変なことになる。私も焦らなければ・・・」と思うばかりで、三砂さんのような主張をおこなったり受け止めたりする余裕さえないのが現状だと思う。ただし、三砂さんご自身もこういった問題には気づいていらつしやると感じた。

今後は、三砂さんと同じ感性や問題意識を持っているがゆえに、かえって一生涯子宮を使わない女性も増えていくはずである。しかし、それでもよいではないかと僕は思う。

三砂さんは、『オニババ化する女たち』の中で、生理や生理に伴う暗い気分のことを「卵子のかなしみ」と呼んでいる。これは僕がとても好きな言葉だが、しかし、その「かなしみ」が分かる心を持つてさえいれば、「女性らしい女性」だと言えると僕は思うが、いかがだろうか。

これだけの格差社会だからこそ、子宮に子どもを宿したことが無くとも、「この女性は子どもを産んだら、良い母親になるだろうな」と男性に思わせるような女性であるというだけで、妊娠・出産は疑似体験したことになるのではなからうか。

もし三砂さんと全く同じ感性や問題意識（いつまでもいい女でいたい、恋愛していたい、子どもも欲しい）を持つていたとして、実際にそれが実現できているかどうかを女性に問うのは、かなり酷な

ものがあると思う。

「周りの同世代の女性ができちゃった婚・離婚を繰り返すのを見て、自分は社会の風潮・流行から遅れているのではないかと苦悩しながらも、それでもやはり長続きする結婚生活を求めて慎重になっている女性は、オニババの定義から外すべきである」という、僕がいつも主張しているような内容は、三砂さんの著書には、なるほど、確かにはっきりとは登場しない。

おそらく、三砂さんの著書を読んだ「まじめな」女性は、その点に屈服させられ、傷を負った可能性があると思う。僕は、三砂さんの著書が図らずも巻き起こした皮肉な世論をそう読み取った。

その意味では、「結婚・妊娠・出産の喜びは、実際にそれらをやってみない女性には分からない」という、三砂さんの世代以上の女性によく見られる言い回しは、かなり残酷でもあると思う。

せっかく女性を元気づけるために発せられたはずのこの言葉は、むしろ三砂さん自身と同じ感性と問題意識とを持っているはずの一部の未婚の日本女性の耳には届かず、届いたとしても浅からぬ心の傷を残し、逆に、早々と「カレシ」を作って妊娠していった奔放な女性の耳に「勝利感」として先に届く可能性が高い。また、残念ながら、実際にそのようになっていくようである。

だから、これからの課題は、三砂さんのような社会的地位や恋愛・結婚・妊娠経験のない日本女性がどうやって「心の救い」を見つめるか、ということではなかるうか。そして、そのために男性がやるべきこともあるのではないか。

このえも言われぬ「日本人の世代間の価値観の齟齬の残酷さ」について語り、解決の糸口を見つけていくことが、僕が自分の冒頭の「対女性共感覚」を告白したときから思い描いている最終目標でもある気がした。将来的に、結婚・妊娠・出産を望みながらも叶わず精神的に傷ついた女性の層と、すでに社会的名声を得て自由に女性論を主張できる三砂さんのような女性との間に入って、うまく仲裁するような活動でもできたら本望だ。

あともう一つ。就活（就職活動）と恋愛とを同一視したら怒られるだろうが、少しくらい、以下のような考え方も許されるだろう。

恐ろしいことを書くけれども、ここ最近の統計の動向から言って、来年度に就職する新卒の四割近くの人は三年以内に（二〇一四年までに）その職場をやめるか転職することになる。

その三年の間にやることと言えば、上司の顔色を伺いながら懸命に仕事を覚えることであって、心に余裕を持って散歩に出かけることでも、文学に親しむことでもない。しかも、三年後に優先的にその職場で上の地位に上がっていくことができるのは、「仕事ができるが控えめな性格の女性」ではなくて、「仕事ができる社交的な性格の女性」であると思う。

もし、娘に「どこでもいいから早く就職しろ」とけしかけている母親がいたら、娘に「どの男でもいいから早く一緒になれ」と言うかどうか考えてほしい。物事というのは、一見すると違うようで、かなり似ていることがあるのではなかるうか。

せっかちな人は何事もせっかちであるし、落ち着いた人はいつも

落ち着いているものだと、僕は感じる。落ち着いた恋愛を求める女性  
性が就職にせつちかちであるとうとすることは、せつちちな恋愛を繰り  
返す女性が落ち着いた就職をしようとすると同じくらい、困難  
で不自然なことではないだろうか。それは、男性にも言えることだ  
と思う。

### 第三部 謹賀新年

二〇一二年一月四日 起筆、攔筆、公開

本文は創作性を伴わず、著作物と見なし得ないため、パブリック  
ドメイン

著作者を明示する引用の場合のみ、CC BY-NC-ND 4.0

明けておめでとうございます。

本年もよろしくお願ひ申し上げます。

### 第三編 三十歳〜三十九歳

#### 第一部 謹賀新年

二〇一三年一月一日 起筆、攔筆、公開

本文は創作性を伴わず、著作物と見なし得ないため、パブリック  
ドメイン

著作者を明示する引用の場合のみ、CC BY-NC-ND 4.0

明けておめでとうございます。

本年もよろしくお願ひ申し上げます。

#### 第二部 謹賀新年

二〇一四年一月一日 起筆、攔筆、公開

本文は創作性を伴わず、著作物と見なし得ないため、パブリック  
ドメイン

著作者を明示する引用の場合のみ、CC BY-NC-ND 4.0

明けておめでとうございます。

本年もよろしくお願ひ申し上げます。

#### 第三部 「都民性」とは何か 憲法の「公共の福祉」規定から 考える。

二〇一四年六月二十七日 起筆、攔筆、公開

この記事では、「東京都民性」（または、東京首都圏全体を含む広義の意味で使われる「都民」としての「都民性」というものがある）とすれば何か、私なりに最近考えていることを中心に書いてみる。特に、東京首都圏で生まれ育った都民ではなく、首都圏外から移住したか首都圏に一時的に在住している都民のそれについて、最近個人的に意識している新宗教問題と関連付けて考えてみたいと思う。

●都民の絶妙な「沈黙」

常々、「無宗教・無党派層の一員だが宗教・新宗教ウオッチャーです」教などという宗教の信者を自称している、野次馬の私としては、最近では色々印象に残る出来事が多い。（この自称宗教の名称は、意図や内容さえ示すことができればいいので、いつも変化してしまっているが。）

二〇二〇年の東京オリンピック・パラリンピックに向けて、JR山手線の品川駅と田町駅の間の新駅が建設されることが決まり、国や東京都は駅名の検討に入っているようである。

先日、とあるマスメディアを仕事で訪れたところ、この新駅名候補に「幸福の科学前」が出ていると知り、ああ、確かに近いなと思いつつもさすがに仰天したのだが、もし表沙汰になったところで、都民が全力を挙げて阻止するはずだと思っ、それ以上は気にも留

めなかった。もちろん、私も一都民として阻止する。（と、そう思っているうちに、その話は立ち消えになったようである。）

しかし、こういう話が全くあり得ない話ではないことは確かだ。天理教に由来する奈良県天理市・天理駅、金光教に由来する旧岡山県浅口郡金光町・金光駅などの前例がある。タブーでも何でも無い。あれよあれよという間に、新宗教都市は形成される。

この手の話題で最も有名なのが、もちろん中央線の信濃町駅である。この駅を中央線に揺られながら通り過ぎる時も、いつか「創価学会前駅」になったほうがよいのではないか、などとわざとらしく思いながら通り過ぎていく。何と言っても、ほぼ二つの字（あざ）全体が、国民の意志・投票によって現政権を取っている政党の支持母体の町であり、駅の広告もこの宗教法人のもので彩られている。信者が経営する商店なども多くある。こういう区域があること自体は、「法の支配」がある限り、どこまでも合法なのだ。

天理市をめぐっては、時々実施されるアンケートでも、天理市民のほとんどが、自治体・駅名・市政・公共サービスなどにおいて特定の新宗教団体の思想が色濃いことについて、「何とも思わない」・「不満はない」と答えている。

現在のところ、ある字（あざ）や地域一帯の土地や建物を特定の新宗教団体が占有することが、憲法第十二条や第十三条に規定される「公共の福祉」規定や、憲法を根拠に主張される環境権・眺望権・景観権などに反するという解釈は、存在していない。

この天理市民の回答は、高齢の天理教信者とその子孫が市内に集



住を続けていることと、宗教に関心のない若年者（特に学生。天理教信者の子供を含む）が全国平均の二倍も市内に在住していることから来ていると考えられる。ただし、高齢の信者はもはや最期までそのつもりであるだろう一方で、若年者の中には、単に通学や通勤でそこに一時的に住んでいるだけで、いずれどこかに転居する身である人も多いはずだ。おそらく、「天理市」の由来さえ知らない若年者も多いと思う。

私の出身地の岡山県には、幕末三大新宗教と呼ばれた三つの新宗教のうち、金光教と黒住教の本部がある。（もう一つは天理教）

特に金光教は、自らをその名の由来とする金光町（二〇一四年現在）は浅口市の一部）に小規模の宗教都市を形成し、金光駅自体がこの宗教への玄関口ようだった。

儒教的幕藩体制による伝統的・神道・仏教への抑圧が終焉して国家神道・教派神道の整備と廃仏毀釈が行われた明治時代から、オウム真理教による各事件によって宗教カルト問題と破防法の適用の可否の議論が頂点を迎える時代までの約百年間の、ちょうど後半期（ほぼ戦後に該当）に見られた、日本の一地方の光景と言つてよいと思う。

規模としては天理教のほうが大きく、天理市自体が、市長や市議会議員が天理教信者であるか否かにかかわらず、天理教を中心とする宗教都市を標榜している。

ところが、東京都民の内面や宗教意識となると、地方の人々のそれらとは全く逆の現象が起きる。

一年ほど前、仕事で英国大使館へ行くため、東京メトロ半蔵門駅を降り、最寄りの4番出口を出ようとしたら、新宗教団体真如苑のビルを通過しなければ出られないことに気づいたことがあった。最近新設された出口である。

一般利用者のほとんどは、全く知らないか、知っていても「新宗教施設の存在を無視する（いわゆる俗語で「シカトする）」ことによつて通勤・通学などの行動を取っているようである。事あるごとに新宗教を利用して市や町を上げて祝祭的気分を作り上げ、盛り上がる地方とは、その点で異なっている。

ただし、表向きは都民のほとんど誰からも不満が出ない信濃町駅はともかく、半蔵門駅のようなケースはかなり問題だと思う。

特定の宗教法人の建造物の内部を通行する出口を鉄道事業者の主導または容認の元に設置する時、憲法の「公共の福祉」との関係はどうなのかと疑問に思い、色々と調べてみたが、結局、最近の石原伸晃環境大臣の言葉として話題の「最後は金目」、つまり、「鉄道事業者と宗教法人の双方に利益があるからそうした」という結論しか見えてこず、愕然とした。

もっともここでは、一般利用者は、「信教の自由」を侵害されているわけではない代わりに、新宗教団体の建造物内部をそうと知らずに通行したり通行中に勧誘を受けたりしたことによつて、通行妨害の被害を受けたり気分が悪化や苦痛感を覚えたりしているから、「公共の福祉」規定や自治体の迷惑防止条例のみが関係してくるようになる。

特に、当該宗教法人の信者の利用や一般利用者の当該宗教法人施設への誘導を目的とすることが明らかであって、そのことが利用者のコンスタントな増加という利益を鉄道事業者側にもたらし、そのことを鉄道事業者も利用客に隠しているケースについては、憲法との整合性をもっとまじめに考えるべきだと思う。

（それ以来、しばらく別の出口から遠回りして出てみたが、こんなことで自分一人だけ動きを変えるのも、歩行者の流れに逆らって迷惑だなと、我ながら可笑しくなった。）

冒頭の新駅名候補については、おそらく、新駅建設予定地の隣の泉岳寺駅が、泉岳寺境内からある程度（幸福の科学の建物よりは）距離があるにもかかわらずそう名付けられていることと、泉岳寺が関府六箇寺の末寺として曹洞宗寺院の統括と江戸僧録を司った経緯があることから、曹洞宗の系統でない各新宗教団体による曹洞宗泉岳寺と京浜急行への反発が関係しているのかもしれない。

（余談だが、元々日本の曹洞宗という宗派は、新宗教思想やカルト思想が出にくい宗派である。これは、いわゆる「魂（靈魂）」についての考え方の相違によるもので、それらが出やすい宗派には浄土真宗や日蓮宗・日蓮正宗があるが、このあたりのことは宗教学・仏教学上のテクニカルな話になるので、省略する。）

ただし、曹洞宗関係の駅名だからと言って、それを理由にこの駅を利用しなかったり、この駅を利用するたびに怒ったりする浄土真宗信者や日蓮宗信者は、今やほとんどいないと思う。

● 「都民性」なるものがあるとすれば・・・

色々と憲法との整合性を問われそうな例を挙げたが、私はこれらの問題を見るにつけ、全国から集まった雑多な人々の集合体である都民の絶妙なバランス感覚の面白さを感じる。

おおまかに見ると、「都民のバランス感覚と国・都の旧態依然とした体質との乖離」および「都民のバランス感覚と地方の高齢者の旧態依然とした体質との乖離」の二点を感じる。

まず、一点目。オカルトブーム全盛期で、なおかつ地方ほど新宗教団体に抵抗感のなかった一九八〇～九〇年代前半にあつて、オウム真理教を母体とした真理党の候補を軒並み落選させたように、都民は「怪しいものは知ったことか」と、冒頭に挙げたような駅名候補なども無視するに決まっている。

ところが、今見たように、JR・東京メトロなどの鉄道事業者や国・自治体は、新宗教団体との蜜月関係があるし、あまりこの話題に関するバランス感覚は期待できないと思ってしまう。

この手の話題を今の大学生や同世代の同僚に振ってみたら、この手の話題自体を知らないか、どうでもよいと答える人が多い。このこと自体については、私個人としては極めて不満だが、彼らは彼らで「自分に関係がない物事は知らない、頭の中に意見・価値観・宗教観そのものが存在していない」ということによつて絶妙な中立的立場を都内・都会において形成し、非常に器用で華麗な投票行動を

見せているのかもしれない。

そろそろ「宗教法人性善説」そのものを放棄する必要があるとも言えると思うわけだが、その一環として宗教法人の税制優遇を廃止して莫大な税金をかけたところで、新宗教団体よりも先に地方の小さな神社や寺がつぶれるに決まっている。むしろ、伊勢神宮を本宗とする巨大宗教法人の神社本庁や大規模な単立宗教法人（靖国神社など）は話が別である。

それに、新宗教団体がつぶれたら、まずは政治家や政党が困る。自民党や安倍首相は統一教会・国際勝共連合がなくなったら困るし、公明党は創価学会がなくなったら困る。石原慎太郎や石原伸晃や平沼赳夫や日本会議は、霊友会、崇教真光、念法真教、神道政治連盟などがなくなったら困る。社民党は、今やほとんどそれ自体が女性優遇思想党である。共産党は、元々それ自体が思想である。何も民主党だけが、朝鮮半島に媚を売って外交政策や政権運営に失敗したわけではないのではないか。自民党も、朝鮮半島の新宗教団体の恩恵を受けて成り立っているのだから。

結局、JR山手線の新駅名は、「芝浦」・「芝浜」など地名に由来する従来型のものか、「オリンピッククシーサイドたかなわ」や「大江戸みらいベイパーク」などの、日本人にも外国人にも分かりにくい、いわゆる「キラキラ駅名」になりそうな気がする。

二点目。多くの日本の都会人（特に東京都民）が新宗教問題や「公共の福祉」問題に無関心であり、付和雷同して人ごみの中を移動しているということ、すなわち「意見そのものが脳裏にない」という

ことよってかえって中立的立場が適切に現出されている、という性質を「東京都民性」や「日本の都会人性」そのものだとすれば、これは日本の地方の金縛りのような宗教意識と対比的に見ることができそうだ。

すなわち、天理市や旧金光町のようなケースは、今の東京ではまず起こり得ない事態であり、世田谷区一体や吉祥寺の街の周辺が一つの宗教団体を基盤として再形成されるなどということは、まず近い将来にはないと思う。

日立市や豊田市のように、特定の企業名が地方自治体名となっているケースでは、日立市に三菱電機ファンや東芝ファンが住んだり、豊田市にホンダファンや日産ファンが住んでいるからと言って、この人たちが日立市や豊田市の市役所に文句を言いに行くなどということはありません。過去にはまじめにそういう行動を取った人もいただろうが。

しかし、新宗教団体名、しかも神道・仏教・キリスト教・イスラム教などのように国内外の政府によって（多少定義は違うものの）カルト指定されていない正統派巨大宗教団体ではない宗教団体の名を、自治体名や駅名に据え置いたり新たに付けたりするようでは、今後ますます日本人の宗教感覚や「公共の福祉」感覚は、海外から見て摩訶不思議なものになっていくと思う。

これは、ヨーロッパやアメリカの自治体名や駅名に、古代ギリシヤ・ローマの神々やキリスト教関連の用語が付けられているのとは、わけが違うと思うのである。あちらでは、国家・文化自体が宗教的・

一神教的であり、しかもそれは正統派なのだから。

だから、東京都は東京都で、オリンピックの開催都市としての矜持を持って、国・都や地方の高齢者の旧態依然とした宗教感覚や「公共の福祉」感覚とは異なる意識を持たなければならぬと思う。

#### ● 結び

ともかくにも、今回言ってみたかったのは、一般都民の付和雷同体質は、政府・自治体や地方の高齢者のそれよりも、かなり健全なものではないか、ということだ。都民は、その付和雷同・無関心体質の絶妙な器用さによって、憲法が規定する「公共の福祉」を図らずも体現していると思う。

不思議とバランスの取れた、およそ「意味」というものを持たない、雑多すぎて結局何も「語らない」、意見がなさ過ぎるために放っておけば勝手にオートマチックに調和が取れる、無味乾燥の、ニュートラルな都民の世論。これが最近、私自身の頭の中では、思索の材料として気になるテーマである。

#### 【参考文献】

宗教法入法

<http://law.e-gov.go.jp/htmldata/S26/S26HO126.html>

宗法人と宗務行政

<http://www.bunka.go.jp/seisaku/shukyohojin/>

#### 第四部 謹賀新年

二〇一五年一月二日 起筆、攔筆、公開

本文は創作性を伴わず、著作物と見なし得ないため、パブリックドメイン

著作者を明示する引用の場合のみ、CC BY-NC-ND 4.0

明けておめでとうございます。本年もよろしくお願い申し上げます。

#### 第五部 「歩きスマホ」をカント哲学から考える

二〇一五年十二月十八日 起筆、攔筆、公開

ブログの更新は久しぶりである。時間はあるのだが、サイトやブログに意識がなかなか向かないのが主な原因である。来年二月頃か

らは、意識が向く予定である。ただし、予定は未定である。

そんな中、あくせくと街を歩いていて色々と思うことは多い。社会観察の好きな私である。一応、哲学専攻だった身として、最近感じていることを一つだけ書いておく。

最近いわゆる「歩きスマホ」が流行し、メディアでも問題視され報道されているので、街を歩くときにも自然に歩きスマホをしている人に目が行くようになった。と言っても、街のど真ん中では、歩きスマホが視野に入らない瞬間を探す方が難しい。

入力が面倒であるので、今私はこのような人間を「歩スマー（ホスマー）」と呼称させてもらう。また、「歩きスマホ」は「スマ歩（ホ）」とさせていただく。入力が面倒というのは口実で、実は皮肉を込めた批判としての略語である。

一見すると笑い話のようであるし、確かにユーモアを込めている部分もある。しかし、歩スマーが自分でホームから転落したり人から注意されるのは自業自得だとしても、人にぶつかって怪我をさせたり、それで人の命を奪うような場合もある。人の命に関わる重大な社会問題の話なので、どうしても書いておきたい。

### ●歩行距離や運動の問題

そうして観察を続けたところ、歩スマーではない自分がいかに日常的に蛇行しているか、いかに無意識に気を遣い苦労して、歩スマ

ーを避けながら歩いているかということがよく分かるようになった。最近はこのような歩き方をしている人たちは皆、真のボランティア、善人だと思ってしまうようになってきた。

おそらく、同じ距離を歩くにも、歩スマーよりも非歩スマーのほうが一・〇五倍から一・一倍くらいの距離は歩いているのではないかと思う。新宿・渋谷・池袋などの人口密集地帯では、ほぼ真横に避ける羽目になることもあるので、一・二倍以上は自分の方が歩いていると思う。となると、歩スマーは知らず知らずのうちに、外出時の運動・ダイエット効果もずいぶん失っている計算になる。

歩スマーは、歩行スピードが遅いのに、通行ルートと脚の動きが直線的だし、視線も一点凝視型だ。筋肉に負荷がかからず、歩く距離も短く、脚部の横方向へのふんばりなどが、高齢期に至って急に弱くなるのが予想されると思う。

後ろから歩スマーを追い越すときも、結局は、自分の方がややこしく変な動きをして追い越すことになる。どのタイミングで追い越せばよいかにも、頭を悩ませることになる。歩スマーには、少なくとも歩スマーでない我々にはあるような「後ろから誰かが来ている」という直観、「自分のせいで困っている人への申し訳なさ」、日本語で呼ぶところの「気配」や「空気」への知覚能力が欠落していると思う。

スマ歩推進派は海外にもいて、「スマ歩は第六感を養う」などとする論文まで出ているが、見てみたところ、かなり怪しくて、不謹慎ながら笑ってしまった。周囲の人たちがよけてくれる親切さを、歩

スマー側の第六感によるものと曲解して、無茶苦茶なデータを用いている。むしろ、第六感や動物的直観があるのは周囲の人たちの方だと私は思う。

石器時代や縄文時代、というより昭和時代のつい最近まで、猟・漁をするときには、横方向への敏捷性などの基礎的能力が必要だったはずだが、歩スマーはそのような動物的な動き、前方注意、危機察知、事前の歩行位置の横方向への修正、方向転換というものを一〜三メートル以内に近づくまでほとんどしてくれない。だから、全てをこちらがやらないとどうしようもない。

万が一「一億総スマホ社会」になって脚部・臀部・腰部の動きが根本的に変わっていくと、未知の症状も出てくるのかもしれない。しかし、一番問題なのは、歩スマーの危険性そのものにほかならないが。

歩スマーに出くわすたびに、なぜ自分がよけなければならないのかと憤りを覚えていたが、自分の方が忍耐力や敏捷性などを劣化させないで済むのだという、やたらと冷静な医学的・生物学的視点で考えるようになってからは、多少は憤りもなくなってきた。

### ●注意警告への気づきの問題

スマ歩は、鉄道事業者やスマホ事業者も問題視しているし、スマ歩禁止のポスターも色々なところに貼られるようになった。だが、

ポスターを見るのは「顔を上げている、ポスターを必要としない人たち」なのだから、本当に意味があるのだろうか。

歩スマーは、ポスターを全くまたはあまり見ていないか、見ても無視しているか、歩きスマホができない人の方を「不器用だ」、「前方を注意して自分を避けてくれるべきだ」と考えているか、のいずれかだと思われる。

そうになると、歩スマーは、スマ歩に限らず、読書や人付き合いや仕事の仕方もいい加減なのではないかと思えてくる。そう思われても仕方がない。

### ●歩きスマホしなければならないような重大事案かどうか

スマ歩する以上は、歩いているときに親族危篤の一報が入ったとか、上司からメールが来て早急な返信が必要だとか、今からデートの予定のところ悲劇の破局のメールが来て、足も涙もとどまるところを知らないとか、そういった緊急事態かと思いきや、私の横目に見えた歩スマーのスマホ画面は、五〇%くらいがゲーム画面、三〇%くらいがラインなどのSNS画面である。

歩スマーはセキュリティ意識も甘くなるようで、他人が画面を見ようとしなくても見えてしまう点も問題である。

こういったスマ歩ゲームが歩行の列の先頭にいるだけで、後ろ全員が引つかかるのである。あるいは、私の前方を歩く五人全員が

歩スマーで、六人目の私が憤りを覚えながら歩いているようなケースも頻繁に起きている。

そもそも、前述のような重大事案に迫られて真摯に対応できるような人たちは、最初から立ち止まり、道の端に移動してスマホを触ることのできる人たちであるはずだ。

●せつかくの「無意識の善行」がはらむ危険性

警告自体に気づかないのは歩スマーの自己責任の問題だが、同じ問題なのは、我々のような非歩スマーが「無意識によけている」という点だと思う。哲学になるのはこの部分である。

何となくでも腹が立ちながらよけるなら、まだ相手に対するマナー遵守の要求のニュアンスがこちらの顔の表情や態度のどこかに出るし、道義的な威圧効果もあると思う。

事実、「そっちがよけないとこっちから当たってやるぞ」という念を込めて近づくと、何となくそれが相手に伝わり、相手も気づいてよけることがある。

自分一人のときにはやらないように気をつけているが、自分の後ろから高齢者や小さな子供や障害者が歩いてきている（車椅子でついできている）ことが分かっているときは、自分がよけたら後ろが危ないので、歩スマーが歩きにくくなる位置（私を迂回しなければ私の後ろに通り抜けられなくなるような位置）を意図的にいかめし

い態度で歩いているのは確かである。

しかし、よほど意識していないと「無意識によけてしまう」親切さを日常的に繰り返す私のようなタイプの人たちがいる限り、それは歩きスマホへの一種の加担だし、いつまで経っても歩スマーは堂々と歩き続けることになると思う。そんなことでは、道徳と反道徳が反転してしまう。理屈の上では、自分が人の命を軽視しているのと同じだ。

●カントの善を思う

このような無意識的善行は、本当は哲学者カントからすれば、理想的な道徳律の体现であるかもしれないし、善人の見本であるかもしれない。真のボランティア精神かもしれない。

しかし、ここは心を鬼にして、カントに失礼をして、街で個々人が堂々と行動すべきであるとも思う。

そう考えていると、段々と「歩スマーに意図的に激突し忠告して、スマホを壊滅させる」などということが人道的に最も正しいのではないかと思えてくるのだが、私は、そんな無駄な善行はしていない。

というのも、カントの「善」論、義務論とは、「何かのために」、「誰かのために」などと理由をつけ、自分に酔いながら善行を行うことを善しとしないからである。ならば、そこに気づいたのであれば、かえって「無思考・無判断のまま、絶対悪だと思ふ人間に向かつて

問答無用に激突する」というのが、至上の道德の実行であるということにもなる。でも、カントが根本的に述べているのはそういうことであるし、カント哲学の最大の長所にして短所は、そこである。

もちろん、普段から他人に関心がなく歩いていく人が、他人の忠告の意味に気づくとは思えない。しかし、私個人としては、国内の歩スマーに対してそんな激突・忠告作戦をとるべきだと考えるかどうかは、やはり微妙なところである。せいぜい私も、口頭で簡単に注意する勇気しか持たない。

しかし、種々のアンケートによれば、九〇%くらいが「自分の行動は危険だと思う」としながら、八〇%くらいが「歩きスマホをやったことがある」という結果となっている。私としては、同じ人間たちばかりがやり続けている一方で、一度危険性に気づいてその後はやめたという人たちが大勢いるのではないかと予想する。

歩スマーに憤りを覚えるのは、「この社会の構成員たる国民個々人の、生まれ持った身体で懸命に歩行し通行する精神が組み合わさって生じる、阿吽の呼吸の平和的な結果としてのプライベートスペース」に身勝手に入ってきて、その温かみを台無しにするからだ。家族関係でも、恋愛でも、上司と部下の関係でも、人間関係なら同じことだ。

ロシアが平気でトルコの領空に侵入したが、そのときはトルコは意図的に撃墜作戦を採用したのだった。個人の歩きスマホのレベルにおいても、小さいいざこざばかりか、殴り合い殺し合いが起きるような事態になっているわけである。だから、歩きスマホ問題は、

一方では自己責任、一方では日本人の道德やマナー、日本に対する評価が問われる内戦である。

これで世界に向かって、「お・も・て・な・し」などと笑顔で日本と東京をアピールしてしまったのだから、二〇二〇年までに何とかしないといけない。歩スマーに罰金を課するのは難しいとしても、過料を課すのはよい案だと思う。

## 第六部 謹賀新年

二〇一六年一月一日 起筆、摺筆、公開

本文は創作性を伴わず、著作物と見なし得ないため、パブリックドメイン

著作者を明示する引用の場合のみ、CC BY-NC-ND 4.0

明けましておめでとうございます。

本年もよろしくお願い申し上げます。

## 第七部 遅い？新年の挨拶

二〇一七年一月七日 起筆、摺筆、公開



皆様

明けましておめでとうございます。本年もよろしくお願い申し上げます。

とは言っても、毎年迷うのが挨拶の仕方、季節のマナーです。今日からは、年賀状への返信などは、寒中見舞いになりますね。しかし、これも人によって感覚が違わらしく、一月五日から寒中見舞いだという人もいれば、一月十五日あたりでも「明けましておめでとうございます」と言う人もいます。こういう場合は、送る相手の社会的地位、マナー感覚、普段の性格、日本語の癖などから類推して文面を変えたり変えなかったりする、というところに落ち着くのが「マナー」かもしれません。

このほか、「新年明けまして」は間違いで「明けまして」で始めるのが正しい、目上の人には「迎春」では無礼で「謹賀新年」が正しいなど、注意すべきとされる点も色々ありますね。年賀状の相手を、「最初から送る人」と「もし年賀状を頂いたら返信する人」と「メールで新年の挨拶を送る人」と「新年の挨拶自体送らない人」とに分ける作業も人によってはあるでしょうが、もはや分けるほどの人数に年賀状を出さない人のほうが多いはずで、私もそうです。

私としては、目下の人から「迎春」「新年明けまして」の年賀状やメールが来ても、「まだ（知識としては）日本語やマナーを知らないのだな」と思うだけで、言語能力やマナーがない人だとは思いますが、古い社交辞令の知識が足りないことについては、年配の人、

高齢者ほど結構な剣幕で怒る割合も高くなるので、注意するに越したことはないようです。

ただし最近では、こういった「人の顔色を窺って、良き社会人としての自分の立ち位置を維持する」社交辞令上のマナー（表向きハードでフォーマルな面）よりも、例えば、独身者に対して家族の写真や裏に載せた年賀状を出さない、心身が大変な状況にある人に対しては、葉書での返信が大変な（暗黙裡に返送を強要することになる）年賀状よりも自分なりの言葉で温かいメールを送る、など、相手が置かれた状況についての内面的な（ソフトな面での）思いやりのほうが、人として大切だと思います。日本中、世界中の人々全員が正月を同じように祝っていると思うことが、最大のマナー違反と言えるかもしれませんね。

しかし、これも社会の上層部の年配男性や一般の高齢者ほど、後者（ソフトなマナー）よりも前者（ハードなマナー）を重視しているというところは、社会に揉まれる中で如実に感じるわけで（冠婚葬祭、中元、歳暮など）、伝統的な社交辞令文化と新時代の挨拶マナーの程よい折衷文化が日本に起きるのは、もう少し先になるのだと予想しているところです。

一方で、このあと一月末の旧暦の元日に、旧暦で生活している和歌関連の数名の知人と新年の挨拶を交わすことになりましたが、これらの方々との挨拶も、次第に気軽なメールや新暦での普通の挨拶に移行しており、時代錯誤・時差ボケとさえ言えるような旧式の社交辞令は、もはやほとんど無くなっています。それでも、時候の挨拶、

年賀状、冠婚葬祭、中元、歳暮、葬式仏教などが「社会人として守るべき日本の伝統」だと思つて新卒の若年者を叱っている企業の上司の皆様方、社会の上層部の人々には、それらのほとんどが明治の近代化によって初めて成立したものであることを知つて、表向きではない旧暦生活の圧倒的な伝統を目にしていたいただきたいということは、しばしば思います。

ともかく、今のようない時代にあつては、どの世代が特に正しくて、どの世代が特に間違つていてということはないと思つてわけです。時代を知らなければ知るほど、何がマナーなのかが分からなくなるのが奇怪です。

## 第八部 謹賀新年

二〇一八年一月一日 起筆、攔筆、公開

本文は創作性を伴わず、著作物と見なし得ないため、パブリックドメイン

著作者を明示する引用の場合のみ、CC BY-NC-ND 4.0

明けておめでとうございます。

本年もよろしくお願い申し上げます。